

瓜生卓造

良寛讃歌



東書選書



東書選書 75

良寛讃歌

瓜生卓造

瓜生卓造 (うりゅうたくぞう)

1920年、東京に生まれる。早稲田大学政治経済学部卒業。「早稲田文学」「文学者」等の編集委員を経て創作活動に入る。文芸家協会会員。

著書—『単独登攀』『八郎潟』『銀嶺に死す』『谷川岳』『檜原村紀聞』『多摩源流を行く』『奥多摩町異聞』『横浜物語』『小林一茶』『大岩壁』ほか多数。

良寛讃歌

瓜生卓造 著

東書選書 75

定 価 — 一二〇〇円

昭和五十七年六月七日 第一刷発行

発行者 — 小高民雄

発行所 — 東京書籍株式会社

東京都台東区台東一五十六 二二〇

印刷・製本 — 図書印刷株式会社

© Takuzo Uryu 1982, Printed in Japan
0395-599075-5313 乱丁・落丁の場合はお取替いたします

良寛讀歌

目次

一	出雲崎……………	7
二	禅林の微雨……………	25
三	雪しまき……………	43
四	出家の歌……………	61
五	武相の旅……………	78
六	玉島円通寺……………	97
七	行雲流水……………	115
八	蹉跌……………	132
九	五合庵……………	150

十	亀田鵬斎……………	169
十一	煩惱……………	187
十二	辛亥剣……………	204
十三	足跡を追って……………	220
十四	原田鵲斎……………	238
十五	晩年相聞……………	256
	あとがき……………	286

装幀・勝井三雄

良寛讃歌

一 出雲崎

日本海は凪いでいた。

スレート色の空から鈍い日ざしが洩れ、黒松の梢に汐の香が絡む。文月半ばの昼下がり、北国の浦は物憂げであった。

灰色の防波堤に薄日が沁み、利久色の静波が渺茫と連なる。遠く水天彷彿のなかに、佐渡ヶ島の幻影が浮かぶ。あえかな逆光に青藍の海は色を失った。揺蕩う力もなく、漁る舟影も見えない。

足もとに群がる尾花が海風に揺らぐ。葛の大葉が無遠慮に絡みつく。薄も負けずに剣刃をのばしていく。静かな格闘を続ける緑を越して、出雲崎の町並が見下ろされる。良寛生誕の地である。背後は山、前は海原、町は渚に沿った狭い平地に細長く続く。白い街道を挟んで、三角屋根がスキ間なく軒を寄せる。木立の姿もほとんどない、古い町である。「古事記」が語る大国主命の

御神幸にはじまる。出雲の神の地先、出雲崎である。佐渡に鉾山が発見されて、室町時代から金銀の陸上げ港として栄えに栄えた。足利十三代義輝当時の水帖（検地帖）によると、各戸は十一間一尺、五間三尺五寸、三間四尺七寸と、三様に区割りされた。十一間は庄屋など、ごく少数の有力者、つぐものが五間、常民はすべて三間であった。四百年を経た今も、封建の区割りを残しているのかもしれない。

家々はトタン屋根にコールタールを塗り、羽目は風雪に荒びて灰色に沈む。浜風は四季の別なく、濃厚な塩分を吹きつける。金属は赤錆び、木材はひび割れて細る。屋根にタール、羽目にはニスを塗って、自然の暴威と戦う。昔は屋根に石を置き、羽目や軒は枯汐で塗りがためた。家並には鉄筋の建物一つ見えない。黒い屋根に鈍陽（どんやう）が沁みて、かつての股賑は夢と消えた。置き去られた映画のセットを見るようである。

中央部に長方形の空間がある。石柱の柵で整然と区画されている。山本良寛の生家、橋屋の跡である。宝暦八年（一七五八）、良寛はこの地で呱呱の声を挙げた。生家は出雲崎きっての名家で、代々駅長、庄屋を勤めてきた。現在の屋敷跡は間口七間ほどだが、かつては二十数間もの広大なものであった。町では一軒だけが別格とされていた。間口は狭められたが、昔日の威厳を残して、今も町の中央に位置している。海寄りに、奥まって小さな堂宇があり、ここだけが松の緑に囲まれている。良寛堂である。地元の郷土史家、佐藤耐雪の肝入りで、大正十一年九月に設立された。設計者は安田鞞彦（ゆきひこ）、宇治の平等院を模した、という。鞞彦は良寛に私淑し、良寛の芸を世に広め

た。相馬御風とともに双壁といわれる存在である。耐雪は堂宇を中心に大愚山良寛寺の建立を企てたが、伽藍の建築は思うにまかせなかった。堂は戦後二十七年に、県の文化財に指定された。「良寛和尚誕生之地」と刻まれた大きな石塔が建っている。

良寛誕生の時、父以南は二十三、母の秀子は二十四歳であった。系図によれば、橘屋の祖は山本左衛門入道橘泰景で、奈良朝の左大臣橘諸兄の末裔という。泰景は十一世紀後半の人物で、諸兄からは三世紀半が経過している。二人の関係や、山本家が出雲崎に落着いた経緯は詳らかではない。泰景からまた七世紀余を経て、以南良寛父子となる。

良寛の祖父母の代に橘屋は跡取が絶え、与板町の新木家から以南を養子に迎えた。町第一の地主、名望家で、以南は二男であった。橘屋に入って山本次郎左衛門伊織と名乗った。以南は雅号である。秀子は佐渡相川町の素封家、同族の山本家の出、夫婦養子の形で橘屋を継いだ。

良寛は和歌や詩の外に、散文の類は殆ど残していない。日記もないし、作品に年代の記載もない。わずかな書簡と周囲の人々の語り伝えて、生涯が推測されるばかりである。幼少時代の良寛は、橘屋の跡取として、蝶よ花よと育てられた。父以南は風雅人で、厳しい庄屋の躰を少年良寛に強いたとは思われない。母の秀子も良寛の詩歌から想像すれば、心やさしい母性であったらしい。良寛は慈父慈母に育くまれた。過保護児であったのかもしれない。それが成人後の性格形成になんらかの影響を与えたとも考えられる。

十一、二歳の頃、良寛は地藏堂の中村家に預けられ、大森子陽の塾に通った。実家から東北に

二十キロの地点で、現在の分水町^{ぶんすい}だが、越後線の駅名は地藏堂である。中村家の主婦は以南の從兄の次女で、良寛は氣楽に振舞うことができた。子陽は近隣に聞こえた儒者であった。

地藏堂の勉強時代は、五、六年に及んだものと思われる。大庄屋としての必要な教養を身に付ける目的だが、橘屋は代々学問教養をことさら重んずる家系であった。

家系にふさわしい和漢の知識を身につけて、良寛は生家に帰ってきた。十六、七歳の頃であろう。良寛は後年少年時代を述懐し、油を注ぎ足し、終夜机に向かつていても飽きることがなかった、と漢詩に綴っている。勉強家であったことが窺われる。

実家ではただちに庄屋見習の生活に入ったが、子陽塾の勉強のようにはいかなかった。生来世俗には疎い性格であった。迅速な行動家ではなく、ひたすら瞑想思索を好んだ。方便で事を処することなどはまったく考えられなかった。内奥の声に聞いて、正しいと判断したことだけを言行に移した。自分の言行が橘屋や宿の人々に不利となろうとも、いたしかたなかった。彼は自らを偽ることはできなかった。宿の人々と代官所の意見とは、しばしば対立した。彼は仲に立って円満に解決しなければならぬ立場だが、内緒話までありのままを双方に伝えた。そのため両者の怒りを買ひ、かえって紛争を呼ぶ結果となった。人々は「名主の昼行燈」と陰口を叩いた。橘屋はすでに衰運にあった。七百余年の土台骨が揺らぐうとしていた。

遠く聖武帝の昔、神龜二年（七二五）に、佐渡は遠流の地と定められた。出雲崎が渡船の拠点となった。日蓮、親鸞らの教祖たち、南朝の忠臣日野資朝^{すけちか}も配流の憂目に会い、橘屋で船を待った。

佐渡の金山が栄えると、宿は権力者たちの活躍舞台となった。役宅がならび、旅籠、料亭が軒を連らねた。宿の繁栄とともに橋屋も栄えた。繁栄の余滴は南に続く尼瀬あまざにのびていった。新興の尼瀬は出雲崎に属していたが、京屋野口家を中心として、ことごとに対立し、室町時代には一つの町として独立した。京から見て新しい尼瀬が上町、古い出雲崎を下町と呼んだ。両町に対立は、以南の代には抜差しならぬものになっていた。橋屋は利よりも旧家の体面を重んじた。京屋はなりふりかまわず現実と取り組んだ。橋屋は花にこだわり、京屋は実に就いた。京屋は八方手をつくし、役人たちを饗応し、多額の袖の下を贈った。尼瀬はしだいに^{あまざ}出雲崎を上まわる賑わいと呼んだ。橋屋は京屋のやり方を苦々しく思ったが、ただ手を拱くばかりであった。宿に活気があり、遊里料亭が賑えば、人々は水が低きに就くように流れていく。慶長三年（一五九八）大久保石見守は佐渡奉行所を尼瀬の養泉寺に置いた。さらに寛永二年（一六二五）には代官所も出雲崎から尼瀬に移された。このあたりから江戸中期にかけて、佐渡金山の最盛期であった。経済の成長とともに宿の経営も近代化が要求された。旧弊に固執する橋屋は以南誕生の百年も前からジリ貧の状態にあった。宿も賑わいを失い、人々は庄屋の態度に失望した。こんな生家の状態を良寛はどんなふうに受けとめていたのであろうか。良寛には人の心も、庄屋の為事もすべて空しく、かつ複雑で理解しがたいものと思われた。それ以上に偽りで塗りかためられていた。悶々の日々を送るうちに良寛は出家を決意した。十八歳の時である。世の醜さも、儂さも、煩わしさも、身に纏いつく七百余年の重い殻も、一切を振り切りたかった。名主見習の職を弟の由ゆい之に譲り、尼瀬の禅林

光照寺に入った――。

私は丘の上から海を見詰め、漫然と良寛のことを考えてすごした。海の色は終始変わりなかった。

左下に良寛記念館が見える。瀟洒な白壁が海に向いてL字型に伸びている。谷口吉郎博士の設計により、昭和四十年に建てられた。モダンな海辺のホテルにも見える。出雲崎随一の近代建築で、多数の良寛の遺墨が陳列されている。

○

記念館の庭は海を眼下に芝生が美しかった。飛石を拾って裏側にまわりこむと、細径が草を分けていた。赤土の道とラフな石段とが続く急坂である。

両側から樹木がおおい茂り、樹種は雑多である。黒松の老木、樺の若木、サンゴ樹の横に朴の大葉が夏の陽をはねかえす。柏が鮮かな緑を見せ、椿、梅、桜などの花木、ネムの梢がピンクの綿花に飾られる。夾竹桃が真紅に咲く。エゴノキの幹に藤蔓が絡み、ナタ豆が垂れ下がる。葛や蔦がところかまわず暴れまわる。小さな野の仏が、夏草のなかに頭を持ち上げている。みどり児を失った母親が供えたのであろうか。素朴で愛くるしい目鼻が、じつとなにかを見詰めている。文字の欠けた石塔を橙色の甘草がとりかこむ。

やがて紫陽花の咲く古寺の境内に出た。三十三体の観音像が安置されている。円明院、橘屋の菩提寺で、良寛の母が眠る。真言宗豊山派である。急崖中段の狭い平坦地に立派な本堂が窮屈そうに見える。裏は切り立った山で、前庭は狭く、老松の向こうに日本海が鈍く光る。街道からは急な石段が登っている。良寛の弟が十一世住職であった。左衛門泰雄、円澄師、以南の三男である。

玄関で声をかけ、住職に利を通じた。心よく応じられて、庫裡の二階に通された。新築の日本間である。書棚に仏書や良寛に関する著作が見える。現住吉田俊恭師は細面の温厚な僧であった。五十前後か、円明院二十世で、地元で国語の教鞭をとっている。私は境内の眺望と清々しい雰囲気賞めた。

「景色はいいのですが、なにぶん急な山でして、昔から山津波に悩まされてきました。戦後も三十六年の台風で庫裡を埋められまして……」と、おだやかに語る。「良寛さんの弟さんが十一世住職で、ゆかりはきわめて深いのですが、寺にはなにも残っていません。弟さんの名は、多くの書物に円澄とありますが、寺の沿革誌によれば観山です。詳しくいえば権大僧都快慶観山房有澄法印となります。誰かが最初に円澄と誤り、つぎつぎと孫引された結果でしょう。良寛さんが西国行脚中にお母さんが亡くなりました。帰郷してまずお墓に詣でたことでしょうが、お寺にきたという文字の記録はありません」

良寛は二十二歳の時、国仙和尚に従って西下し、岡山県玉島の円通寺に入った。同寺での修行

は十一年に及び、寛政二年（一七九〇）三十三歳で、国仙から印可を受けた。翌年師は六十九歳で入寂し、良寛は寺を出て、さらに五年西国の行脚に従った。天明三年（一七八三）に生母が四十九歳で病没した。寛政七年（一七九五）には父以南をも失った。六十歳、自殺であった。理由は詳らかではないが、橋屋は最悪の道を辿っていた。人心も乖離し、五年先、十年先の命運は決定的に思われた。七百余年宿に君臨してきた大庄屋の最後を見届ける勇気が、彼にはなかったたのである。すでに名主職を由之に譲り、隠居の身であった。暇になって、じっと考えていれば、やり切れないことばかりが頭に浮んだ。彼も良寛の父であり、瞑想思索型であった。ハムレットは行動を得意としない。思索が先で判断があとにまわり、しばしば決断力を欠く。煩瑣な名主の仕事などには一切不向きで、彼がすでに昼行燈であった。考えあぐねた末に、彼はあらぬ方向に走った。一方彼は熱烈な皇室信奉者であった。江戸幕府の政策がことごとく氣に喰わない。皇運の衰頹は武家の専横によるものと思ひ込んでいた。しばしば京にのぼり、勤王の志士たちとの交わりを深めた。宿の経営も幕命に非協力で、度重なる譴責にも会っていた。京屋はこれを幸に以南を攻め立てた。以南は一日と立つ瀬を失っていった。皇室の衰微を憂える「天真録」一卷と、辞世の一首を残して桂川に入水した。旬日後父の計を知った良寛は、京都で行なわれた四十九日の法会に旅先から馳せ参じた。供養のち高野山に詣で、翌八年、十七年ぶりで出雲崎に帰ってきた。

「西国の行脚から帰って、良寛さんは出雲崎を通りこして、寺泊てらどまりに庵を結んだ、といいますが、